

---

# 俺は魔人であいつは勇者で！？

h o z

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

俺は魔人であいつは勇者で！？

### 【NZコード】

N1322N

### 【作者名】

honz

### 【あらすじ】

魔王が打ち倒され、魔王軍に所属していたおかげで、職を失つてしまつた魔人のカイン。

魔王を打ち倒すために、来たばずなのに道に迷い、森の中で迷子になつていた勇者のシャル。

この二人の出会いが、世界におおきな変革をもたらすこととなる。

## 第1話 僕は一ートでこれが始まりで！？

『勇者によつて魔王は倒された』

普通なら物語の終わりを告げるはずのこの言葉、しかし僕にとっては違う、僕にとつてはこれから新たな就職先を探すという何とも面倒な物語の始まりなわけだ。

俺の名前はカイン、何？ フルネーム？ そんなもん長すぎて忘れたとりあえずカイン、たつた今職を失つた哀れな魔人だ。おかげで俺の黒い瞳は死んだ魚のようになつてゐる。

さつきまでの肩書きは34番目の魔王軍第三大隊隊長つていう無駄に豪華な肩書きを持っていたわけだが今魔王が倒されたから魔王軍はこれで解散、よつて新しい仕事を探さにやいかん訳だ。

お、俺の元部下が俺のところにきたみたいだ。

「隊長、これからどうしましょつ？」

「おい、俺は隊長じやない元隊長だ、そこんところ間違つなよ。これからどうするつてどうしようもないだろ」

「ですよねー、じゃあ自分は実家帰つて畠仕事でも手伝おうかな

「そつしろんうしろ、親孝行してー」

さつきから俺のところにこいつやって何人も相談にきやがる、大変なのは俺もだつづーの。それにしても勇者もひどいもんだ、数千人の勇者が一斉に攻め込んできてどうやつて、戦えてんだよ、魔王なんて、ただの金持ちの馬鹿か、歳とつた爺さんがほとんどだつていうのに、攻め込まれて勝てる訳ねえだろ。

最近の魔王はみんな魔王名乗つて数ヶ月でくたばるから、魔王軍に入つたつて全然稼げやしない、なんか人間の間じや魔王を打ち取つた英雄は随分といい待遇を受けるらしいから、血眼になつて突撃してくるし、怖くて岩陰に隠れてるか死んだふりするのが関の山だ。

とりあえず城の宝物庫でも漁つて何かもらつて家帰るか。

と、思つてきてみたんだが勇者どもが宝奪い合つて殺しあつてやがる、うー、こわつこんなとこ居られるかよ、せつぞと逃げようつと。

こーで俺は重大なミスをしちまうわけだ、何かつて？　こけたんだよ、それも盛大に。鎧を着てるせいでのひるさいからすぐばれちまう。

まあ、魔王を倒せなくて少しでも稼ぎたい奴の前に魔王軍の元隊長が転がり込んできたんだ、向こうは手柄建てるチャンスだと思つて突撃してくるよなそりや、あははは……

あーこわつ、勇者こわつ、あれはもう勇者というより金と権力の亡者だろ。あんな鬼じつこもう一度としたくない、てか、もう追いかけてきてないよね？　まだ追いかけて来てたら俺もう泣くよ？　いやマジで。

うん、とりあえずは大丈夫そつだ、こんな隊長マーク付いた鎧なんて着てるんじゃなかつた、よしもう寄り道せずに帰ろう、まつすぐ帰ろう。

俺は黒い髪に着いた土を払い、立ち上がり岐路に着く。

歩くこと20分我が家にとうちやーく、とはいっても家族もいな

いし別に特に何もする」とないから、もつ寝み。

その日の夢で勇者どもに追いかけられる夢を見て、朝起きたら枕がぬれてた、泣くつて言つたけど本当に泣くとは思わなかつた。

さて、仕事探しに街でも行くか、おつと朝飯、朝飯。とりあえず俺はパンに何もつけずに食つてすぐに家を出た、今は仕事見つかるまで節約しないとな。

俺は職を探すために俺の家から歩いて5分ほどの街に来てみた、石畳の道に石造りの家屋、街頭には鉄塔の上に魔石がつけられているだけのシンプルなものが夜にはそれなりに明るくなる。

それにしてもおかしい、街に昨日まであふれていた求人広告すべて撤去されている、きっと風で飛んでつたんだよね、うんそうだよね。

とりあえず知り合いの店を回つてみたが、すべての店でもう働き手は足りてるつて言われたよ、やべーよ、このままだと俺餓死するよ？ マジで生きていけないよ？ しうがないから森で何か仕留めてくるか、このままパンだけの生活つていうのもむなしいし。

森の中に入つてもう1時間は経つが、いまだに猪一匹出でこない、木の実ばかり集まつたけど、肉が食いたい！ 俺はベジタリアンじゃない！

それからじばじばくわまよつていて、遠吠えが聞こえてきた。

もうその時の俺は肉が欲しくてたまらなかつたから、もついつのこと狼でも何でもいいと思つて遠吠えの聞こえてきたほうへと駆けだしちまつたんだ。いやせや、今思うと軽率だつたもう少し考え

て行動すべきだった。

とにかく走っていると狼型の魔物が誰かを襲つてゐるのを見つけち  
まつたんだよ、ここで見捨てるほど俺は聞く人に慣れないわけで、  
すまん嘘だ、ただ肉を食いたかつただけだつたと思つ。

まあ、一応隊長なんてやつてたんだそれなりには強いんだよ俺つ  
て、そこら辺の魔物風情に遅れなんかどうねえんだぜ。

ここで出すのは、俺の十八番、加圧魔法、こいつを使えば大抵の  
やつは動けなくなるし動けたとしてもかなり動きは鈍る、こいつを  
使って今まで逃げ延びてきたといつても過言ではない。当然大した  
こともない魔物だから地面にへばりついて動けなくなるわけだ、さ  
て、こいつらを持つて帰る前に一つ感謝でもされておくか。

「おい、あんた大丈夫か？」

俺はさつきまで襲われていたやつを見ると、なんと女じやねえか、  
しかもかなりかわいい、金髪碧眼ロングヘア、来てる鎧は、まだ  
新しそうだ、腰には1メートルほどの両刃の直刀携え、背中には弓  
と箭、こんだけの装備してこんな魔物相手に苦戦してたのかよ、  
ずいぶん弱い奴だな。

俺なんて適当な麻の服だつてのに、こいつより強いんじゃないの  
か？

「ありがとう、それにしてもすごい魔法ね」

そう言いながら、こつちに近づいてくるその女を見ていて何か違  
和感を覚える、なんていうんだろうかこれは、何かがおかしい。

「まあ、これでも魔王軍の隊長やつてたんだぜ」

アリスは血魔に笑った瞬間に、女の表情が変わり剣を振り上げる。

けど、振り上げすぎて後ろにけやがつた。

「だ、だましたわね」

さつきから、何かおかしいと思っていたがもしかしてこいつ……

「お前、勇者かつー？」

「やつよ、この魔王の手下め、私が成敗してやる」

正確には元手下だ、ついでに行つあればこいつは倒される気がしない、とりあえず加圧魔法つと。

「えいっ」

「あああ、やつとなによ」

ああ、やっぱり動けないか、なんだか見ててだんだんかわいそうになってきた。魔法とておくか。

魔法を解いてみたが立ち上がるうとしない、まさか今ので殺しちまつたなんてことはないだろ？ 今まで数多くの戦場に立つてきたが殺したことがないことが血魔だった俺がまさか、こんなところで殺しちまったのか？

不安になつて俺はその女に近づき様子を伺う。

「ひっく、ひっく」

あれ、もしかして泣いてる?

「あの~」

「なによー、どうせ私は落ちじまはれのダメ勇者よ、魔物に襲われてるとこを敵に助けられるよつたダメダメ勇者よー」

ああ、泣いてるよ、完全に泣いてるよビックリのままだと完全に俺悪者だよね、でもここで殺されてあげてこいつのも変だし……えーっと。

「泣くな!!」

「ひっく……ひっく……」

あ、泣き止んだていうか、すげい我慢してる。

「いいが、俺だつてす」一ぐダメな魔人だつた、でも今では隊長になれるくらいにまでなつた、だからお前も変われる頑張れ!」

正確には隊長は粗われやすいから、くじ引きで負けたやつがなつたんだけど嘘はついてない、だいたい俺この加圧魔法以外つかえないし。

「頑張る……」

うん、泣き止んでよかつたこのまま帰つてこのことが知れたら、女泣かせた男として有名になつちまつといだつたぜ。

「私、頑張つて、魔王を倒す」

「あ、魔王ならもう打ち取られたよ」

しばしのあいだ、沈黙が続いた。

「えつ――――――じゃあ、あたしは何を田舎して頑張ればいいのよ!？」

「知るかボケ、自分で考える!..」

「もういい、帰る」

そう言つて、女は歩き出したのだが……

「おい」

「なによ、もう帰るんだから放つておいてよ」

「いや、そっち行くと魔人の村だぞ」

再び沈黙

「お前、もしかして帰り道解らないのか?」

女はこくつと頷き、うつむいてくる。  
あ、また泣きやうになってきた。

「案内して……」

「いや、人間の街のほうに行つたら俺狩られるから無理」

あ、目に涙たまつてきた。

「えつと、とりあえず俺の家来るか? えーと、名前は?」

「シャル……」

これがこいつとの出会いだ、何とも間抜けのこの勇者との出会いが俺の人生どころか世界を変えるきっかけになるなんて誰が思っただろうか、だれも思うわけねえよな……

## 第2話 僕は家主であいつは偉やつや！？

さて、シャルを俺の家につれてきたわけだが、なぜか我が物顔で椅子に座つて足を組んでいやがる、なぜこいつはこんなに偉そうなのだろう、もつとこう、部屋の隅で体育座りでもしているのがふさわしいような状況だといつのだ。

「うょいと、あんたの名前聞いてなかつたわね、おしえなさこよ」

なぜ、じたばなに高圧的なんだこのダメ勇者は？

「カインだよ」

「やつ、じゃあカイン、お茶出して」

なぜ、俺が命令をされているのだろうか、確かに客人を招いたのだから茶の一いつや二いつ出出すが、まあいいや、とりあえず出しておこう。

「はい、どうぞ」

シャルの目の前にティーカップに入れた紅茶を置くと、シャルは早速一口飲んですぐにカップを置いた。

「なにこれ？」

ん？ 虫でも入つっていたのだろうか？ いやまさか俺に限つてそんなへまをやらかすわけがない。

「こんなまずい紅茶初めて飲んだわ」

「馬鹿言つな、家で一番高い紅茶だぞ」

なんだった、客人用のうちで一番高いとはいっても、もう一種類しかないけど、とりあえずこれがまずいだと。

俺はティーポットから自分のカップに注ぎ一口飲んでみる。

うん、うまい茶葉の量、お湯の温度共に最適だったのがよくわかる、これがまずいのだったりこいつはいったい今までどんな紅茶を飲んできたんだ？

「もういいわ、さっきの汗かいちやつたからお風呂貸して」

「そこの、扉の奥が風呂だお湯は沸かしてやるよ」

「ここまで、言われても優しくする俺って寛大だな、いやほんと。

シャルは俺の指差した扉を開け、すぐに閉めた。

「何よ、あの狭くて汚いお風呂は！？」

「いや、普通だろ……」

「あれが普通だっていうの？ 見るからに貧乏そうな格好してると思つたら本当に貧乏人なのね、もうここから昼食の用意して」

さすがの寛大な俺もさすがにこれには頭に来たよ、もう怒った。俺はシャルの襟をつかんで家の外に放り投げてやった。

「ちよっとなにするのよーー！」

「こんな貧乏人にかまわずビリヤードをとお帰りください、ほら荷物」

そういうて剣と弓と箭を投げて扉を閉めた。

「ちょっと入れなさいよー。」

そういうながらシャルが扉をたたいてくるが、もう無視だ、このまま夜の森で魔物にでも食われてしまえ。

それからしばらくの間扉をたたきながらシャルはギヤー、ギヤー、わめいていたが、諦めたのか扉をたたく音も声も聞こえなくなつた。少しばかり罪悪感はあるが、あんなことを言わされてまで面倒を見てやるような理由などない、大体あいつは勇者なのだから、ナーナー死のうがあいつの責任だ。

それでも非情になりきれないのが俺つてやつで、少し心配になつて扉を開けて外の様子を伺つてみる、

家の前にはいないようだがいつたいどこに行つたのだらうか？

とりあえず俺は家を出て森の中へと歩きだした、決してシャルが心配だからじゃないぞ、食材探しだからな、間違うなよー！

森を歩くこと数分、適当に木の実を集めながら歩いていると、誰かがすすり泣く声が聞こえてきた。こつそりと近寄り見てみると、予想通りシャルが木の下で体育座りをして泣いていた。

「うう……ひっく……かえれないよ……」

もう反省しちだらう、からりそろそろ許してやるか。

「おい、シャル」

俺が話しかけると、シャルはあわてて涙をぬぐい赤くなつた目で睨

んできた

「なによ、カインは敵なんだから話しかけないでよ」

「面倒くせこやつだなこいつば。

「わうかこそうかこ、俺は敵だから話しかけるなと。せっかく許してやうと思つて迎えに来たのにとんだ無駄骨だつたな、じゃあな

ナウコつて、俺が振り返り、家に帰るフリをするトシャルが慌て出す。

「ちよ、ちよとまつてよ

「なんだ？ 敵の俺に用か？」

なんだかいじめるのが樂しくなつてきた、もうしばらへこじめるとするが。

「いや、やの

「なんもないなら帰るが

「ちょっと待つてつて言つてゐるやつめー

「なうなんだよー？」

「のままじや持があかなそつだな、しょうがないかりせりやめてやるか。

「あ、あんた私の仲間になつなさいー。」

「はー?」

今こいつなんて言った？ もしかして俺の耳がおかしくなったのか？

「仲間なら何の問題もないから仲間になれって言ひたのよ」

またこいつはぶつ飛んだ発想を、開いた口がふさがらねえよ。

「勇者の仲間に魔人なんて聞いたことがねぇぞ？」

「それは今までの勇者、私はそんな奴らとは違うの」

その弱さは確かにほかのやつらとは違つた。

「それで、仲間になるの？ ならないの？」

「こりでないなって言つたらまた面倒なことになるよな。

「はいはい、仲間になつますよ  
「ほ、ほんと？」

こいつて言わると黙つてなかつたのかこいつは？

「へーへー、ほんとです」

「じゃ、じゃあカインの家に行つてもいいの？」

だんだん目が輝いてきたなこいつ。

「仲間なんだからいんじやないの？」

「そ、そうよね仲間だもんね」

「あ、でもあんまりわがままだったら仲間やめるから  
「わ、わかったわ気をつけろ」

「」ついして結局シャルは俺の家に帰ってきたわけだ。

「風呂に入るか？」

「うる」

実際に素直でよろしく。

「そうか、そここのタオル使つていいぞ」

「のぞかないでよ」

「のぞかねえから早く行け」

まったく、そこまで俺は落ちぶれちゃいねえっての、さて、今のうちに買い物済ませてくるか。

買い物から帰ってきたがまだ、風呂から上がって来てはないみたいだ。俺は脱衣所の扉をノックする。

「なによ？」

「脱衣所に適當な着替えおいたから」

「わかったわ」

俺は女の服などわからなかから、適当に店で見繕つてもらつたが大丈夫だらうか。とりあえず今のうちに飯でも作つておくか。

しばらくして、風呂から出てきたシャルは俺の置いておいた、青を基調としたワンピースを着て出てきた、特に文句は言わないからよかつたんだとしておこづ。

「ほれ、かなり遅いが昼飯だ」

「ありがとう」

そう言つてさらにパンとさつきの魔物の肉を焼いたものに果物で作ったソースをかけた料理を渡したら一切文句を言わずに食べた、さすがに魔物の肉は文句言つと思つたんだがな。

夜になり、寝る場所が俺の使つていたベッド以外にないことに気付く、さすがにシャルを床で寝させるわけにもいかないので、ベッドをシャルにやつて俺は床の上で毛布にくるまつて寝た。

次の日の朝、体がすごい痛かったが自分で招いた結果なのだからと我慢する感じよ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1322z/>

---

俺は魔人であいつは勇者で！？

2011年12月5日09時11分発行